

民俗資料館だより

第7号 2000. 3. 25

発行 加茂市民俗資料館

住所 加茂市大字加茂229-1

電話 0256-52-0089
FAX

創立25周年を記念して

加茂市教育長 土佐 弘

加茂市民俗資料館は教育の基盤の1つとして創設され、多くの方々のご協力により今日を迎えることが出来ました。

博物館要望のきざしは昭和30年頃より関係者や理解者の間で論議され、声を大にして要望はされていました。

昭和49年になり初代館長に横山旭三郎氏を迎え「学習活動の推進」「余暇を楽しみながら教養の向上」「調査研究者への援助」と具体的な目標の基に資料館活動が始まった。

民俗文化財が人々の「人生の豊かさ」にとって大切なものであることを知ってもらうため、下記の呼びかけがなされました。

民俗資料館の提言

「文化財は一朝にして生まれたものでない。私たちの祖先が長い歳月をかけて、その英知と技能を傾けて創造し発展させてきた所産である。一中略一やがて、この文化財から次の時代のよりよい生活用具が創造されていくのである。

私たちはこの文化財を失うことなく子孫に受け継ぐべき責務がある。」

設立時のこの提言の心を大切に、多くの方々のご指導・ご協力のもとで一層の努力を重ね、更なる発展を目指して頑張る所存であります。

生涯学習に資料館のご活用を

加茂市民俗資料館長 田澤 弘一

加茂市民俗資料館は、昭和49年8月に旧下条中学校の建物を転用して開館し、平成6年11月には現在の加茂山公園内の旧図書館の建物内に移転し、今年度で折しも創立25周年を迎えるに至っております。

この間、多くの皆様から民具、考古、歴史資料等の寄贈・寄託を受け、約1,200点(収蔵品は約20,000点)を展示しております。

これらの資料は、私たちの先人がその暮らしの中で営々と築き上げたものがほとんどで、筆筭、建具に関するものや機織り、紙すき、陣ヶ峰瓦に関するものなどもあり、地場産業発展の原点ともいえるべき貴重な資料が多く残っております。

さらに、市の指定文化財である七谷水源池遺跡等から出土された土器、灌漑用具、漢方薬製薬器具、手加工時代の建具工具も展示されており、郷土の歴史、民俗に接することのできる施設であると認識いたしております。

このため、市内、市外の学校による施設見学も多く、今後も生きた教材として大いに資料館を活用して頂くことを願っております。

終わりにになりますが、資料館についてご指導、ご協力を頂いた市民の皆様、関係の皆様に感謝を申し上げますとともに、今後ともよろしくご指導をお願い申し上げます。

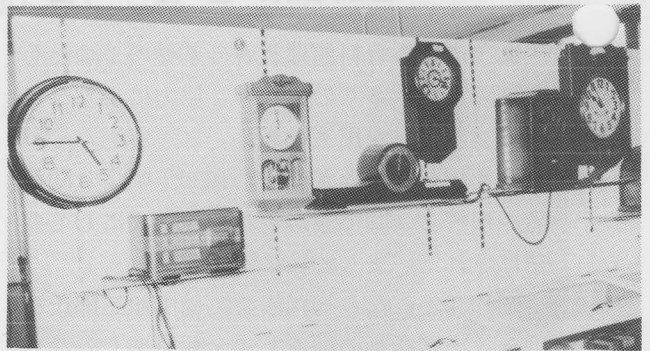
I 待望・加茂市立博物館 — 回顧25年 —

加茂市文化財調査審議会委員長 古 川 信 三

昭和50年刊『加茂市史・下巻』に所載の「民俗編」は、結びに些か筆不足の感なくもないが全編19章、165頁にわたり綿密によく調査研究されて余す所がない。殆ど、市史編纂委員横山旭三郎先生の執筆である。『加茂市史』は昭和46年末頃に執筆要請され、49年半ばに原稿がまとまり、50年3月に上梓されたが、この時期は加茂市民俗資料館創立の時期と全く重なっている。

昭和48年4月、葵中学校の発足に伴い、加茂小学校学区の一部と、石川小学校区の一部、それに下条小学校の全学区が編入された為に、下条中学校は閉鎖された。どんな経緯があったのか知る由もないが、1年後の昭和49年4月には、廃校になった下条中学校校舎を轉用し、忽然として加茂市民俗資料館が創立されている。創業の苦心、辛勞に当たられたのは初代館長横山旭三郎先生であった。

先生は明治42年4月23日、佐渡赤泊村石塚家に生まれ、加茂小・南小・中浦小校長を経て、加茂公民館長、図書館長、民俗資料館長を歴任し、昭和55年3月に引退されている。その間に加茂市史編纂と民俗資料館の創設を、同じ時期に成し遂げられ、実に偉大な足跡を残されている。



(この写真は時計特別展)

横山先生に口説かれるがままに、後任を拝命した素人の私は、残された業績を後生大事と護りながら、資料収集と展示整理に明け暮れた。広い教室が8部屋もある旧校舎いっぱい展示し、収蔵庫も見学し易く配置した。市民に溶け込むように時計特別展、燈火類特別展、講演会などを頻繁にと心掛けた。拓本展は図書館と共催で2年間続ける。記録によれば昭和55年に81点、翌年は85点で、多くの人達の助けがあった。拓本展は私自身が計り知れぬ恩恵を蒙った。20年後の現在に至るも折にふれて石碑のことも書き続ける素地を与えられた有難さである。

昭和44年11月9日、加茂図書館で新潟県民俗学会が開催され、当番幹事横山旭三郎、開会挨拶山口賢俊、司会市村政一、座長駒形彪、閉会挨拶森谷周野、参加者には上原甲子郎、佐久間淳一、佐藤和彦など県民俗界の名だたる学者ぞろいで、加茂では空前で以後もない。民俗と民族の区別さえ知らぬ私が、横山先生に因果を含められ渋々ながら「七谷のさいの神」と題して述べたが、将に「盲蛇」の類であった。こんな要因が重なって10年後、横山先生は私を後任に慫慂されたのではあるまいか。この民俗学会を契機に私は『高志路』の会員となる。

因に、16ミリ映画「加茂の後面」が総会で披露されている。後に「後面」について手を染めた私にとっては、意義深い一つの出会いであった。

平成6年、資料館は宮山に移った。テープカットも空しく、文化はあと廻しにされ易い。

加茂市民俗資料館では約2万点の収集資料の中で、約1,200点しか展示されていない現状である。創立25周年を迎えるにあたり、多くの市民から寄せられた膨大な資料が目の目を見るように、広い博物館の建設を、1日も早かれと切望する次第である。

II 開館のころの思い出とこれからの資料館

関 正 平

今、私の昭和49年4月から10月ころの日記を読み返すと、加茂市民俗資料館に関わることが記録されていて、その頃のことが懐かしく思い出される。同年4月、民俗資料館がもとの下条中学校に創設されることが決まり、開館準備とか諸々の事務は市立体育館にあった公民館や当時の図書館（加茂山の現民俗資料館）で行っていたことが書かれている。

初代館長に決まっていた横山旭三郎先生から、新設の葵中学校に下条中学校が移り、その旧校舎に民俗資料館が開館することを聞いて、私は内心嬉しくもあった。実はその校舎は私の母校であった。そっくり校舎を利用したら、例えば古い校舎だとしても素晴らしい資料館になるだろうと期待したからである。そんな中、開館事務を新生の民俗資料館に移したのは5月下旬ころで、その25日に横山先生と一緒にいき、資料館構想などのお話をお聞きしたものであった。

そして6月上旬、資料館の一角を絵図や古文書の展示コーナーにしたいので、その協力をしてくれないかと頼まれた。当時の私は民俗学も地方史も全く入口にも入っていなかった。身に余る手伝いと思いながらも、少し関心を持ちはじめていた歴史のことだったらいと思い、先生の下で、展示する古文書や絵図の選定をはじめた。当時、私は26歳であった。

そのコーナーのメインは「慶安元年加茂下条境界裁許絵図」と考えたが、現物は市川浩一郎氏の大切な所蔵物であったので、そっくり模写しようと思い、仕上げたのが現在展示のそれである。夏の暑い7月上旬であった。近世の絵図に初めて間近に向かった。この市川本「慶安絵図」は安永年間の写しで、のちにこの絵図の原本が矢立の斎藤家に残っていることが分かったが、200年前に描かれた絵図に直面して胸が高鳴っていたことを覚えている。そして実質的に民俗資料館が展示開館したのは、私の日記では8月20日火曜日である。

さて今、加茂山にある民俗資料館はこれからどう発展したら良いのだろうか。周知のように今の建物はもとの図書館である。展示・収蔵・研究スペースとも全く狭いのが現実である。広々とした新しい資料館の建設を当局にお願いしたいが予算上叶うのは到底望めない。しかし、今のままではさらに見学者の減少化は否めない。県内一とまで言われる収蔵数が活かされない。

考えるに私は今の現状を工夫して、もっと市内の小中学校児童生徒の体験学習の場にすべきでは、と思っている。加茂の歴史を踏まえて、縄文や町・村の生活体験などができる資料館を考えてみては如何だろうか。当然現状の資料館では狭いから必要なら野外で、発掘の現場で、町通りや加茂川に場を変えても良いだろう。とにかく資料館発信の体験学習を通して、より子供達に資料館という場を身近に感じてもらいたいのである。幸い資料館には昭和61年ころから整理した収蔵資料カードがある。これらと資料とを確かめ、収蔵資料を企画に合わせコーナー展示したり、触れて学習するのである。それにはやはり人材の育成である。学芸員だけの負担でなく、その道に長けた市民に呼びかけて、ボランティアでも良いから考えていくのも手ではないかと思う。そして当面の課題として、見学者を案内するサービスも取り入れていくべきと思う。また小額でも入場料有料化を考慮したり、今が真の歴史民俗資料館を考える時期と思う。

Ⅲ 平成11年度の歩み

1、入館者数

平成11年4月～平成12年2月

	市 内	市 外	計
大 人	332	1,073	1,405名
小中学生	355	580	735名
計	687	1,453	2,140名

2、資料収集の状況（2月末現在）

本年度は3名の方から3件6点のご寄贈を賜りお礼を申し上げ紹介させていただきます。

〈寄贈品名〉

- ・蒲原鉄道のスナップ写真 ・初庚申の日に縄を巻いた梁
- ・加茂要害城跡出土 土師器 ・加茂市剣が峰城跡採集 珠州焼

〈寄贈者ご芳名〉

鳴海 忠夫氏 浅見 武彦氏 皆仙陶器店様

3、レファレンス・サービス及びアンケート・調査（民俗資料館への問い合わせ）

平成11年度（4月～2月）レファレンス19件、アンケート・調査8件

A レファレンス

- ・田上の「山田備蓄銭」について
- ・加茂の代表的地主「市川家」にはどのような家訓があるのか
- ・三条市大島井戸場は加茂の猿毛村から移住したものとされているが、何かそれを明確にする文献はないものか
- ・加茂竊について ・翁杉について ・後ろ面踊りの歌詞について
- ・青海神社と加茂神社の名称の違いについて
- ・谷泉寺の阿弥陀如来立像の調査について
- ・加茂次郎吉綱の墓その他について ・加茂紙について ・その他

B アンケート・調査

- ・指定文化財の写真提供について
- ・馬にかかわる文化財の調査について
- ・平成11年度生涯学習・社会教育施設等調査
- ・博物館・美術館の観覧料の調査 ・その他

4、館外活動

① 古文書講座

加茂の夜、5回にわたって実施されているこの講座も15年になりました。今年度も参加申し込み54名で述べ174名の参加を見ました。特に目立ったことは、皆勤者が19名も居られたことです。

○ 日 時 9月7日 9月21日 9月28日 10月5日 10月12日

各火曜日 午後7時～午後8時30分

○ 会 場 加茂市民体育館内 公民館 第1研修室

○ 講 師 加茂市文化財調査審議委員

関 正平氏（2回） 溝口 敏磨氏 佐藤 賢次氏 長谷川昭一氏

○ 内 容

第1回 関氏 「森田千庵関係文書を読む」その1

- ・ 森田千庵の子孫山吉卓爾氏より加茂市図書館に寄贈された古記録「文政事変雑録」について解説・解説する。

文政11年～13年ころの世情について

第2回 溝口氏 「天神林の儉約申し合わせについて」

- ・ 明治16年 天神林一帯が困窮を極めた。

村中で3カ年、衣食住を始め万事のことで省略し、必死で儉約するためのこまかい約束ごとを申し合わせた。

第3回 長谷川氏 「加茂市七谷泉田家の文書を読む」

- ・ 村松藩主堀直利が元禄3年、宝永6年に領民あての基本法が公布されている。これにより法制的にも精神的にも整然とした上下の組織のなかに組み込まれ、領民としての生活は公私共に、この範囲内で営まれることになったのである。また、条文が簡単であったものを補足整備したものもある。

第4回 関氏 「森田千庵関係文書を読む」その2

- ・ 森田逸庵宛江戸大黒や儀助よりの一札
- ・ 養寿堂 森田山叟精製 一粒丸の効能書きについて

第5回 佐藤氏 「越後女の縁付移住政策について」

- ・ 陸奥白河藩の越後女白河縁付政策—凶作で女子を間引きしすぎ、嫁不足になり子供の出生が少なくなった。間引きの少ない越後より人身売買のごとくに娘を金銭で縁ずける。
- ・ 希望者が無くなり中止に成りそうになってからは、水原代官所と常陸・下野の代官との取引が盛んになる。

② 歴史講演会

講師は長年にわたり教育界に情熱を注いで来られました。特にエジプト日本国大使館カイロ日本人学校長としても活躍されました。その他、生涯学習の推進・家庭教育の推進・青少年の育成等に関して指導・助言の活動をされています。

- 日 時 11月13日(土) 午後2時～午後4時
- 会 場 加茂市民体育館内 公民館 第1研修室
- 講 師 加茂市文化財調査審議会委員 関谷 之治氏
- 演 題 「新潟県における戦後教育の発足について」ー下条小学校の場合ー

新潟軍政部教育担当官A. メイヤー女史の指導・助言を受け、主体的人間づくりを重視する「自主的学習」「自治活動」等の研究が広く学校教育計画に位置づけられた。当時の指定校は新潟県の戦後教育のスタートラインに位置し、戦後教育の叩き台、足がかりとしての位置を占めていたと言える。

下条小学校は指定校として、長谷川マサ校長を中心にして5年間「教育の進むべき方向」の模索で努力した素晴らしく、珍しい集団であった。

③ 特別講演会

駒形先生は、新潟民俗学会の中心的な存在であり、指導者としても大活躍をしておられます。多くの貴重な文化財を発掘し、多くの著書により、又報告書にて世に紹介した功績は多大であります。身近な話題について興味深く聴講することが出来ました。

- 日 時 12年2月19日(土) 午後2時～午後4時
- 会 場 加茂市文化会館 小ホール
- 講 師 県民俗学会事務局長 文化財保護審議会会長代行 駒形 聡氏
- 演 題 「加茂のイッチョマエ」

イッチョマエとは「一丁前」と書き、「一人前」ともいう。人生には、誕生から死亡まで種々の通過儀礼がある。子供から大人へ、が「イッチョマエ」だ。

ではその基準となるものは何か、それは自然発生的に伝承されてきている。

①年齢的基準

15歳の「若衆組」入り・満20歳の「徴兵検査」・現代の「成人式」。

②修業的基準

職人社会の「年期明け」、武芸、芸道界。

③ノルマ的基準

一定の仕事量の消化「一人役」農作業。

④試練的基準

特定の試練にトライし、果たす「江戸行き」山地の「熊狩り」。



熱弁の駒形氏

Ⅳ 平成11年遺跡発掘調査と出土遺物について

加茂市教育委員会社会教育課主事 伊藤 秀 和

本年の発掘調査は昨年に引き続き国道403号線バイパス工事に伴う馬越遺跡と民間開発に伴う中沢遺跡の2遺跡を対象とした。いずれも、奈良・平安時代の集落跡で重要な成果が得られている。試掘・確認調査は9遺跡、2周辺地を対象に行った。

①馬越遺跡 — 奈良・平安 —

所在地 加茂市大字下条馬越地内

調査面積 約5,700m²（発掘調査）

調査期間 平成11年8月31日～12月17日

調査原因 国道403号線バイパス工事

調査の概要 調査区は昨年に引き続き、Ⅲ区とⅣ区である。Ⅲ区では掘立柱建物跡2棟、井戸5基、土坑、ピット、溝が多数検出された。また、河川跡やそれに取り付く大きい溝跡等もある。出土遺物は大半が9世紀末～10世紀前半ころと見られ、注目すべき遺物としては木簡や墨書土器（「是人」、「大田」）などの文字資料がある。Ⅳ区からは掘立柱建物跡1棟、井戸1基、土坑、ピット、溝が多数検出された。また、すべての遺構を壊して作られる方形に区画する溝が注目される。出土遺物はⅢ区とほぼ同じ頃のものと8世紀中ごろの土器が出土している。注目すべき遺物は木製の柄が遺在した刀子や分銅形の石製品がある。

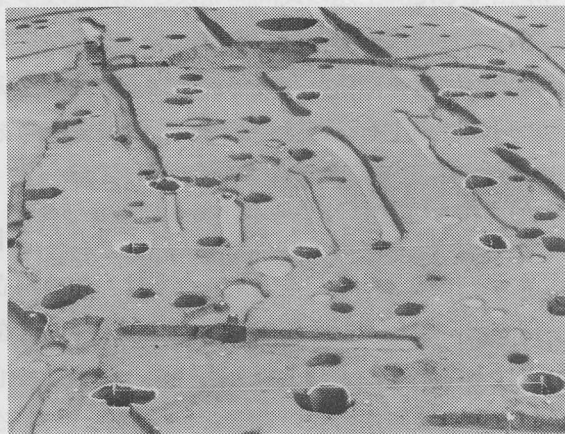
以上、2ヶ年をかけて約12,700m²が調査された馬越遺跡からは8世紀中頃～10世紀前半の有力者を含む集落跡が姿を現した。発掘された資料は膨大であるが、今後の整理調査・分析を経て古代蒲原郡青海郷の実態に迫りたい。



1. 馬越遺跡 2. 中沢遺跡
遺跡位置図 S = 1 / 50,000



馬越遺跡Ⅲ区 遺物出土状況



馬越遺跡Ⅳ区 掘立柱建物跡

②中沢遺跡 — 弥生・平安・中世 —

所在地 加茂市大字下条字芝野地内

調査面積 約630m²（発掘調査）

調査期間 平成11年6月7日～6月12日

調査原因 民間開発（工場増設）

調査の概要 中沢遺跡は扇状地形の端部に立地し、下条川右岸の沖積地にある。過去の確認調査で弥生時代～近世までの複合遺跡であることが知られていたが、今回の発掘調査によって、10世紀中頃の集落跡と弥生～古墳時代の遺物包含層が明らかとなった。遺物は土師器の碗が大半を占める。また、中世～近世の遺物を含む溝跡も検出され、漆器が数点出土した。

これまでの調査成果を総合すると、中沢遺跡は非常に安定した区域で早くも弥生時代後期の活動が見られ、平安時代に入るとさらに濃密な遺構・遺物を遺す。下条川を挟んで対岸に位置する馬越遺跡との関連等、今後に残された課題も多い。



中沢遺跡 遺物出土状況



中沢遺跡 遺物出土状況

③各種開発に伴う市内遺跡確認調査

試掘・確認調査は8事業に対し、9遺跡、2周辺地を対象に行った。県営中山間地域農村活性化総合整備事業に係わり、たて屋敷遺跡・古見道遺跡の調査を行い、前者から中世の珠洲焼が出土した。上述の民間開発及び道路建設事業に係わる中沢遺跡の調査からは、平安時代の土器が多量に出土した。この他にも、七谷の岩野原A遺跡からは少量の縄文土器が、吉津川地区ほ場整備事業に係わり天神林地内で実施した調査では少量の珠洲焼が出土した。いずれも少量の遺物が出土しただけであるが、地域史を考える貴重な遺物である。

編集後記

加茂市の歴史の中でも大きな1ページとなる市史編纂も軌道に乗り、また国道の遺跡発掘の大作業も一段落したところです。今年は当館の創立25周年になります。

創立当時から民俗資料館に関係し、指導助言をいただいている加茂市文化財審議会委員の古川信三氏と関正平氏より玉稿を賜りました。ご多忙のなか誠に有り難うございました。

収蔵庫、倉庫に多数の貴重な資料が眠っている現在ですが、皆様方のお役に立てるような時が来るよう願っています。今後とも皆様方のご支援、ご協力をお願いいたします。